

野沢尚

結婚前夜

読売新聞社

結婚前夜

野沢尚

* 著者略歴

野沢 尚 (のざわ・ひさし)

1960年、愛知県名古屋生まれ。日本大学芸術学部映画学科卒業。映画「その男、凶暴につき」やテレビドラマ「雀色時」(文化庁芸術作品賞受賞)「親愛なる者へ」「青い鳥」など50本以上の脚本を手掛けてきた。97年「破線のマリス」で第43回江戸川乱歩賞、「恋愛時代」で第4回島清恋愛文学賞を受賞する。

結婚前夜

一九九八年(平成十年)八月十一日 第一刷

著者 野沢のざわ 尚ひさし

©1998, NOZAWA Hisashi

編集人 梅田康夫

発行人 黒埼精三

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一―七―一 千〇〇八〇五

大阪市北区野崎町五―九 千五三〇八五

北九州市小倉北区明和町一―一 千八三〇八五

名古屋市中区栄一―一七―六 千四六八四七

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

JASRAC 出9806702-801

結婚前夜
目次

プロローグ	結婚前夜	7
第一章	初恋の人	13
第二章	失恋のカルボナーラ	51
第三章	マイ・フェア・レディ	87
第四章	家族をつくる愛	133
第五章	秘密の夜	165
あとがき		198

カバー写真……高橋和海

ブックデザイン……守先正

結婚前夜

プロローグ
結婚前夜

聞の中で、ガラスが赤々と膨らむ

篠田ガラスの工房。篠田寛治がパイプで膨らませ、手際よくガラスの形に成型する。赤く照らされる寛治の顔は、真剣そのもの。奥から次女の声がする。

真由の声「お父さん、こつち来れば。奈緒ちゃん
んが待つてるよ……ねえ、お父さんったら」
寛治「……（今の作業に没頭）」

周りには完成したガラスがいくつもあり、引き出物用の桐の箱も用意されている。

篠田家の居間(夜)

下町の木造家屋。狭いダイニングの向こうにガラス工房がある。篠田真由が居間から顔を出して父に呼びかけているが、返答な

し。
真由「もオ、お父さんったら、最後の夜なのに……」

居間の壁には、純白のウエディング・ドレスが飾られている。明日それを着る長女・篠田奈緒が、どことなくぼんやりと見つめて

いる。
二十六歳。下町に咲く花。人生の厳しさに立ち向かうことに、まだ恐れがある。

真由「(並んで座り)お父さん、逃げてるみたいよ(三つ指つき)長い間お世話になりました……ってやつ」

奈緒「……(薄く笑む)」

ガラス工房で働いている寛治の姿に

真由の声「引き出物のガラスなんて、ほんとは昨日全部できてたはずなのに……わざと忙し

くしてんのよ、奈緒ちゃんに今晚、そういう
挨拶されたくないもんだから」

篠田家の居間

真由はうっとりドレスを眺め、

真由「奈緒ちゃん、明日これを着るんだね」

奈緒「うん……」

真由「いろんなことがあったね」

奈緒「……（頷く）」

ドレスを眺めながら物思いに沈んでいる姉
の横顔を探るように見ている真由。この物
語の語りべとして人間たちを優しく観察し
ている。

真由のN「同じ頃、東京の山の手でも、もう一
組の家族が結婚前夜をしみじみと過ごしてい
たのです」

成城の高杉家・リビング

白いタキシードと黒いモーニングが並んで
掛けられている。

父——高杉樺夫。まだ性懲りもなく青春にし
がみついているような中年男。

息子——高杉雅人。もともとは軽薄な若者だ
が、様々な出来事に揉まれ、成長した。

とっておきのブランデーを開け、父と子が
静かに飲み交わしているところ。

雅人「（しみじみ）いろんなこと、あったよな」

樺夫「ああ」

雅人「親父……」

樺夫「うん？」

雅人「いいんだな、本当に」

樺夫「何が」

雅人「奈緒と、結婚して」

楯夫「何言ってるんだ。当たり前だろ」

と立ち上がり、息子が着るタキシードの形を整えてやる。

雅人は安堵の面持ち。

真由のN「この日に辿りつくまで、この親子とお姉ちゃんの間にはいろいろなドラマがありました」

篠田家の居間

真由が、「お茶淹れようね」と立つ。

奈緒「……（様々なことを思い出せば思い出すほど）」

居ても立ってもいられない表情になる。

真由のN「ドラマはもう終わった……私はそれを固く信じていたのです。でも油断してしまいました。この夜、驚くべき事件が起こってしまったのです」

真由は台所で「明日は晴れるって、よかつたね」と呑気にお茶を淹れている。

姉の背中に異変を感じることもなかった。

メイン・タイトル

青っぽい炎の中に、溶けそうなガラス細工の四文字――。

結婚前夜

電話のコール音、ズリ上がる。

高杉家の書斎

壁の三面が書物で埋まっている。

楯夫が荷造りをしている。航空便の段ボールに資料と原稿用紙を詰めている。

電話が鳴っている。

楯夫「（出る）はい……もしもし……（相手の無

言で誰だか分かる) 君だな。どこからかけてるんだ」

異変の予兆を感じた夜。

篠田ガラスの工房(後刻)

寛治が黙々と引き出物のグラスを作っている。
真由が「ねえ、お父さん」とやってくる。

寛治「箱に入れていいぞ」

真由「(やや強ばった顔で)ねえ、いないよ……」

寛治「うん？」

真由「奈緒ちゃん、いない」

寛治「奥だろ」

真由「財布がなくなってる。サンダルじゃなく

て、靴がなくなってる」

寛治「……」

立ち上がり、工房の窓から、

寛治「奈緒……奈緒(と外に呼びかけるが)」

虫の音だけ。真由はみるみる不安に駆られる。

真由「これまでだっというんな事があつたし、何が起こったって不思議じゃないよね……」
寛治「馬鹿、何言ってるんだ」

と一喝して、探しに出る。真由も「奈緒ちゃん、お姉ちゃん!」と呼びかけながら。

誰もいなくなつてシンとする工房。炉の炎だけがゴーツと音をたてて燃えている。

真由のN「結婚前夜、お姉ちゃんに一体何が起こってしまったのか……物語は二カ月前、梅雨入り間近の初夏の頃に遡ります」

第一章
初恋の人

下町の風景(二カ月前の朝まだき)

牛乳配達と新聞配達が「おはよう」と通り過ぎる、昔ながらの路地。

その一角に「篠田ガラス」がある。工房と住居がつながっている。工房の表には新作の風鈴が並んでいて、こぢんまりとしたミルク・スタンド風のカウンターが道に面している。

店のカーテンを開けて、奈緒があくびしながら朝の空模様を見上げる。

大きな眼鏡をかけ、髪型も地味で、結婚前夜の奈緒とは別人のように野暮ったい。

ガラス工房

カーテンを開けて光を入れ、窓を開けて熱

のこもった工房に朝の空気を通す。

奈緒は大きく伸びをすると、あと一仕事。

完成した風鈴を一つ一つ丁寧に箱にしまう。

朝の光でキラキラ光るガラス製品に、奈緒

は取り囲まれ、守られている。

寛治が寝間着姿で奥から出てくる。

寛治「徹夜したのか」

奈緒「うん、鹿児島島の松田さんが早く納品して

ほしいって言ってたし」

寛治「御苦労だったな」

奈緒「松田さん、電話で言ってた。篠田ガラス

の風鈴が届くと、夏が来たって気分になるって」

寛治「(笑み)……真由は」

奈緒「……寝てんじゃない？(と、目が泳いで)」

寛治「あいつ、昨夜はちゃんと帰ったか？」

奈緒「うん、門限は過ぎてたけど」

寛治「これからは十一時だな。そう言っとけ」